

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 毛興華

博士課程学位請求論文：『現代中国語における文末助詞“了”の意味機能 ―アスペクト論の観点から―』

本論文は、中国語の文末助詞“了”（以降は **le2** と表記）の意味機能と使用条件を研究対象とし、一般アスペクト論の枠組みにおいて考察したものである。以下まず論文の概要を述べる。

第1章では、本論文の全体的な問題意識を提示し、一般アスペクト論の枠組みを紹介した。

第2章では、**le2** の文法的意味と動詞の直後に用いられる **le1** との違いについて議論した。

第3章では、**le2** に関する主要な先行研究を紹介し、その問題点を指摘した。

第4章では、語彙的アスペクトを主な基準として、中国語の動詞を分類した。

第5章では **le2** の中心的な意味機能について、「ある先行事態の発生に伴う結果・効力が、後続の参照時に存続している」ことを表す＜パーフェクト＞形式であることを主張し、その上で、通言語的アスペクト論における＜パーフェクト＞の重要な特徴の有無と現れ方を観察し、この記述の妥当性を検証した。

第6章では、**le2** を伴う基本文型の **SVOle** 形式に焦点を当て、「ヴォイス」と「アスペクト」の相関性からその成否条件について考察し、当該構文では「主体 **S** の結果」を捉えることができるが、「客体 **O** の結果」をとらえることができず、「客体結果」を捉えるには、「ヴォイス」的に有標の「受動文」や「“把”構文」を用いなければならないということを論証した。

第7章では **le2** には述語形式の語彙的意味における「結果状態」の側面を捉え、参照時における存続を表す＜状態パーフェクト＞用法があることを指摘したうえで、その文法的振る舞いについて考察し、かつ、動作パーフェクトとの違いをも明らかにした。

第8章では、「数量表現」を伴う **le2** 文にまつわる現象を考察し、＜状態パーフェクト＞の用法をもつ「**S+V+数量表現+O+le2**」形式がなぜ「大量・充足義」の意味を含意するのかについて、そのメカニズムを明らかにした。

終章では、語用論的・認知言語学的視点から、**SVOle** 形式のヴォイスに関わる制約の動機づけと、**SVOle** 形式の情報構造について考察した。これらの分析を通して、アスペクト研究における語用論的・認知的アプローチの可能性を示唆した。最後に、今後の課題を提示した。

以上、本論文の概要と主な成果を述べたが、本論文の学術的貢献と価値は以下のようにまとめることができる。まず、本論文はこれまでの研究を踏まえたうえで、**le2** に適用する理論的枠組

みを自ら構築し、コーパスによる実例調査により、その理論的枠組みの有用性を証明した。次に *le2* に関するこれまでの研究を生かしつつ、従来の研究よりも広い視野から総合的な考察が行われ、これまでの研究で説明できなかった部分について、詳細かつ綿密な議論を行ったうえで、合理的に説明した。最後に、本論文は論証を通じて、著者自ら少なからぬ新しい知見を創出し、当該分野に関する研究を大きく前進させた。具体例を述べると、従来説明できなかった、*le2* が主体の変化には用いられるが、客体の変化には用いられないということについて、ヴォイスの観点からの説明に成功した。また *le2* が内的限界性動詞と非内的限界動詞との共起によって生じる違いを状態パーフェクトと動作パーフェクトに求め、両者の異なる振る舞いを指摘し、納得のいく説明を与えることができた。さらに数量表現との共起に関しても従来の説を検証し、修正を加え、より合理的な説明を導くことができた。

以上、本論文の概要と学術的貢献及び価値を確認してきたが、もちろん、論文に問題がないわけではない。個別の現象ではあるが、具体例の説明において、仮説を無理に当てはめようとする、やや強引な記述が見られた。また説明として順序よく行われていない部分が見られ、用語の使い方においても厳密さを欠くなど、いくつか改善点を残したものの、それらは、長らく未解決となっていた *le2* の問題に説得力のある論拠を以って、解答を与えた本論文の学術的価値をいささかも損ねるものではない。したがって、本審査委員会は、全員一致で本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。